

九世紀前半の東アジアにおける国際文書の研究 論文概要書

齊 会君

いかなる地域の歴史においても、それぞれの時代のあり方が後世に影響を与え、それがその地域の歴史的展開に一定の役割を果たしてきたことは、あらためて言うまでもないであろう。それは中国史においても同様であり、各王朝・各時代のあり方や様々な局面が、中国および東アジアの史的展開に一定の役割を果たしてきた。そのような中国の諸王朝の中でも、唐王朝が中国史に果たした役割には、大きなものがあつたと言ってよいであろう。中国の歴史上、唐は初めて本格的な多民族融合的な統一国家を形成したからであり、またそこには多民族国家であるがゆえの諸問題が存在しているはずだからである。

東アジアにおいては、安史の乱によって、唐が東アジアの外交の中心であるという一極体制は一変し、唐・モンゴル高原のウイグル・チベット高原の吐蕃・西南地方の南詔などがそれぞれ勢力を振るって新しい国際秩序を構築するという多極体制に移行した。しかし、九世紀半ばに入ると、それまで唐にとって二つの大きな脅威であった、ウイグルの崩壊と吐蕃の弱体化によって、安史の乱以降に築かれた東アジアの国際秩序がまた大きな変動期を迎えたのである。

このような歴史背景があるため、南走派ウイグルをめぐることは、これまで数多くの論考が蓄積されてきた。その一方で、会昌年間に宰相を務めていた李德裕の文集『会昌一品集』に採録された大量のウイグル関係文書を総合的に分析して、唐王朝がいかなる過程を経てウイグルと手を切りキルギスと結ぶようになる過程を検証し、ウイグル・キルギス交代期における東アジアの国際関係の実態に迫る研究はあまり見られない。

そのほか、本研究の対象である唐代の外交文書に関する先行研究に目を向けると、唐代外交文書の書式や用いられる料紙などを考察する研究、国書の内容から当時の国際秩序を分析する研究、及び国書の授与儀礼をはじめとする外交儀礼の手順を復元する研究などが中心である一方で、ウイグル・キルギス宛外交文書の内容はほとんど分析されておらず、そのうえ外交上最も重要な、外交文書の撰文に注目する研究もさほど行われていない。

また、キルギス・ウイグルの交代に直接関わっていたわけではないが、同時代に唐に滞在していた日本僧円仁は唐で多数の文書を提出したのであり、それがどのような書式に則って、書かれたのかは未だ明らかではない。これも広い意味で見れば、国際関係の中の文書行政に含まれるので、やはり取り上げなければならない問題である。

したがって、本論では以下の五つの問題を設定し、それぞれに対応して各章を設けた。すなわち、①唐は南走派ウイグルの二つの集団それぞれに対して、どのような政策を講じたか、

ウイグル防衛最前線に置かれている辺境の責任者がどのように動いたのか。②唐の南走派ウイグル対策は、朝廷において、どのような議論を踏まえ、いかなる過程を経て決定されたのか。③唐とキルギスとの外交交渉における重要な媒体であるキルギス宛国書は、どのような手順を踏まえて国家の最終意思として発給されたのか。④南走派ウイグルと決裂後に、南走派ウイグル殲滅をめぐる、辺境諸勢力はどのように動いたのか、唐はキルギスとどのような外交交渉を経て、その可汗冊立を決意したのか。⑤円仁『入唐求法巡礼行記』に収録された円仁が唐の役所に提出した文書は、それぞれどのような書式に則って作成されたのか、それが唐で通用した文書及び同時代に入唐した日本僧円珍の提出した文書とは、書式上どの程度共通するのか、あるいはまったく共通しないのか、のごとくである。

各章における検討結果をまとめると、次のとおりである。

第一章「唐の南走派ウイグル対策について——朝廷と辺境の思惑の差違——」では、南走派ウイグル宛外交文書を切り口として、唐の南走派ウイグル対策を総合的に分析し、そこからこの対策に見える中央政府と辺境防衛責任者との間に生じた思惑のずれを考察した。

初めからひたすら帰順を申し出た唃廝囉集團に対して、唐中央政府はウイグルの復興とキルギスへの復讐に務めるべきであると勧める一方、烏介可汗の存在を無視できないので、彼らとの交渉を中断しようとした。だが、のちに唃廝囉が唐に対して「忠誠」を示したことと南走派ウイグル内部の離間を理由に、その帰順を受け入れることになった。一方、烏介可汗集團に対しては、前者と同じくいったんはウイグル本拠地帰還とキルギスへの復讐を要求したが、その大規模な侵入をきっかけに、東北諸蕃に置かれていたウイグルの監使を殺害してウイグルの退路を断ち、帰順を要求する方針に切り替えた。

そして、唐と南走派ウイグルとの交渉に無視できない存在である太和公主に目を向けると、唐はウイグルの「国母」たる太和公主を通して、烏介可汗集團をコントロールしようとしたが、烏介可汗は太和公主を理由に可汗の冊命を要請したり、天徳城の貸与、食糧の賜与など唐に様々な要求をきつけ、自分の身の安全を守ろうとしていた。さらに、ウイグルを滅ぼしたキルギスも、ウイグルに侵入した際に獲得した太和公主を唐に護送することで唐に恩を売り、外交交渉を自国有利に展開しようとしたのである。そのほか、中央政府とは別に辺境防衛の責任者には、太和公主を烏介可汗集團から奪い返すことで手柄を立てようとする狙いもあった。

以上の考察によって、南走派ウイグルとの交渉を始めて以来、一貫して懐柔策を講じ、どうかして戦争を回避しようとしていた中央政府と、南走派ウイグルが辺境に現れてから、終始様々な手段を使ってウイグル襲撃や太和公主救出で手柄を立てようとした辺境将士の間には、思惑の相違が生じており、結果的にはその相違のせいで太和公主が救出されたという一連の過程が明らかになった。そして、ちょうど同じタイミングで、キルギスの来朝を迎

えた唐は、とうとう烏介可汗集団との交渉をあきらめて、キルギスと手を結ぶことを決意したのである。

続く第二章「唐の南走派ウイグル対策の決定過程について」では、前章とは別に、南走派ウイグル対応に関係する上奏文を分析して、中央が国内に特に辺境に対してどのような政策を打ち出したのか、その変遷と決定過程を考察した。

まず、唐・南走派ウイグル接触期においては、唐朝廷は嚙没斯集団に食糧を与えたりして彼らを懐柔していた一方、陳許・鄭滑などから兵士を調達し、太原・振武両軍の軍事力の補充を行なった。次に、唐・南走派ウイグル緊張期においては、嚙没斯集団の帰順を認めると、烏介可汗集団との交渉が中心となり、唐はしばしば辺境を侵攻されていたにもかかわらず、その懐柔に務めており、戦争を回避しようとしていた。一方で、辺境においては、荒廃した城を修繕したり、軍事力をさらに補充したり、北方辺境諸蕃をウイグルの襲撃に動員したりするなど、北方辺境の防衛を前の段階よりいっそう強化するようになった。最後に、唐・南走派ウイグル分裂期に入ると、前章で明らかにされたように、唐朝廷は警告の外交文書を発給し、烏介可汗集団に対して帰順を求める方針に切り替えた。それと同時に、兵力・軍馬の補充や、宿駅の修繕だけではなく、軍隊の指揮権や、軍事行動などについても具体的な指示を出すようになり、南走派ウイグル討伐の準備を整えていた。

また、南走派ウイグル対策の決定手順について分析してみると、一つの議題をめぐって、百官会議→宰相会議を通して諸大臣の意見を求めるか、百官会議を開かずに直接、延英会議か宰相会議で宰相たちの意見を求めるという二つのパターンが確認できる。意見が不統一の場合、宰相李徳裕は諸大臣の意見と自分の意見をそれぞれまとめて皇帝に上奏し、皇帝に認められた意見が国の政策として実行された。

しかし、南走派ウイグル討伐のような重大な政策を決定するに際しては、さらに煩瑣な手続きを取らなければならない。具体的に言うと、①百官会議で集成した意見を議状としてまとめて武宗に上進する、②武宗の命令を受けると、李徳裕は議状に書かれた内容を熟読したうえで、問題点を指摘し、自分の意見を武宗に上奏する、③指摘された問題点と李徳裕の意見をめぐって、二回目の百官会議が開かれ、二通目の議状が作成されて武宗に進呈されると、④武宗の命令を受けた李徳裕はそれを再び分析し、意見が基本的に統一されると、武宗の同意を得たうえで、国の政策として実行されるという手順になる。無論、④の段階で意見が不統一の場合、③～④の過程が繰り返されると思われる。

実は、唐代では本章で検討してきた南走派ウイグル対策のような外交の場のみならず、国内向けの政策などを決定する際にも、同じような手順が踏まれていたと考えられるのである。

第三章「唐のキルギス宛国書の発給順と撰文過程——ウイグル・キルギス交替期を中心に——」では、南走派ウイグルと決裂したタイミングで、唐に使者を派遣してきたキルギスと

唐との間に取り交わされた国書の発給順と撰文過程について考察した。キルギス宛国書の発給順は、「黠戛王に与うるの書」→「紇圻斯可汗に与うるの書」→「黠戛斯可汗に与うるの書」→「黠戛斯に賜うの書」のごとくである。

キルギスの漢文呼称からみると、唐代において、諸蕃の提出した国書は必ずしも漢文で書かれているわけではなく、外国語の国書も存在したと考えられる。会昌年間のキルギスの来書に限って言えば、それはテュルク・ルーニックで書かれた文書であったかまたは使者が口頭で伝えた文言を、中書省の翻訳官が漢文に翻訳し、皇帝に上表されていたと推定できる。しかしながら、当時はキルギス語を直接漢語に翻訳できる者はおらず、ウイグル語を媒介して訳された。

そのほか、国書の撰文機関に関してという、唐の後半期になると、知制誥と中書舎人のほかに、翰林学士が国書の撰文にかかわるケースも少なくない。ただし、必ずしもこれらの官署だけではなく、皇帝の信任を得ている宰相が、国書の撰文を皇帝から直接命じられることもあり、キルギス宛の国書四通は、宰相の李徳裕が撰文した。そして、キルギス宛の国書はさらに皇帝の意向を入れて書き直し、採用された最終案が発給され、文集に採録されたことが明らかになった。また、李徳裕は起草の過程で礼部尚書と相談し、さらにはキルギスの使者とも相談して同意を得たうえで皇帝に進呈し、その指示を仰いだことがうかがえる。

唐がキルギス宛の国書撰文にこれだけの手順を踏んだのは、ウイグルとの前例があったからで、だからこそ、キルギスに対して慎重にならざるを得なかったと思われる。なお、玄宗開元年間に、渤海宛にだされた国書の撰文も同じような過程を経たので、この撰文の手順は、唐代の他の国書を考察するうえでも、参考になるのではないと思われる。

第一章から第三章までで明らかになったように、唐はとうとう南走派ウイグルを見放し、キルギスと手を結んで、その殲滅にとりかかろうと決意した。とはいっても、唐朝廷がすぐに行動に移したわけではなく、辺境軍事力の配置や、キルギスとの調整など、議論せねばならない問題が当然たくさんあると考えられる。そこで、第四章「南走派ウイグル殲滅決定後の関係文書について」では、南走派ウイグル殲滅決定後の辺境宛詔勅と関係上奏文、及び同時期に発給されたキルギス宛国書を手がかりにして、南走派ウイグル殲滅をめぐる唐朝廷の政策決定と、唐とキルギスとの外交交渉の実態を分析した。

まず辺境宛の詔勅と上奏文を分析すると、南走派ウイグルの殲滅をめぐる、唐朝廷は国内の辺境防衛責任者として河東節度使劉沔と幽州節度使張仲武に対して、一日も早く南走派ウイグルの残党を殲滅するために、将兵に褒美を授ける規定を頒布した。張仲武には、幽州で南走派ウイグルの追撃が成功することを前提に、劉沔を河東に帰して、南走派ウイグル殲滅の権限を一任すると約束した。一方で、劉沔に命じて、張仲武のところに使者を派遣させ、出兵の意思があるかどうかを確かめさせた。すなわち、唐朝廷は南走派ウイグルの殲滅を両

者のどちらかに委ねるか躊躇していたのである。

ところが、ほどなくして昭義節度使劉從諫の死による世襲問題から起きた劉稹の反乱と、太和公主救出の功績で生じた張仲武と劉沔の不和を背景に、唐朝廷は張仲武に一任することを決意した。その後、南走派ウイグル残党の帰順を勧誘したり、張仲武に手厚い褒美を授与したりするなど様々な措置を取っていたが、会昌年間において南走派ウイグルの殲滅は実現できなかった。

実は、南走派ウイグルの殲滅をめぐるのは、唐朝廷は辺境に委ねるだけではなく、同時期に来朝したキルギスと手を結ぶこともはかっていた。キルギス宛国書四通の伝達内容によると、唐朝廷は始めから南走派ウイグル残党の殲滅を催促していたが、それに対して、キルギスは太和公主の救出で唐に恩を売り、可汗冊命を要請した。前の三回の交渉を通じて、唐朝廷はキルギスの臣服と南走派ウイグル殲滅を約束することと引き換えに、キルギス可汗の冊命を承諾した。その結果、キルギスはようやく四回目の交渉で南走派ウイグル殲滅に協力する意向を表明した。だが、武宗の死でキルギス可汗の冊命は遂行できなかった。

ところが、次代の皇帝宣宗の時代になると、南走派ウイグルの残党は結局張仲武とキルギスの手によって殲滅され、歴史から姿を消したのである。キルギス可汗の冊命はいったん見送られたが、吐蕃をはじめとする諸蕃の辺境侵略をきっかけに、ようやく決定された。それと同時に、武宗期の南走派ウイグル政策を全面的に否定し、河西地域で興った甘州ウイグルの可汗を冊命し、両国の関係を構築しようとした。武宗期とは違って、宣宗は、東アジアの新たな国際秩序の再編成に直面せざるを得なかった。

第五章「円仁文書の機能的分類と書式分析——円珍文書・敦煌文献との比較を通じて——」では、視点を変えて同時期に唐国内に滞在していた、日本人僧円仁の手によって記された『入唐求法巡礼行記』に見える円仁文書に焦点をあてた。円仁文書には唐の役所・寺衙に提出した官文書と、各地の官僚・僧侶に出した私文書が合計三九通が確認できる。これらの文書を機能（用途）によって整理すると、申状・乞賜物状・献物状・起居状・謝状を含む「状」文書と、「牒」文書、施舍疏に分類できる。そのうち、「状」文書と施舍疏の中で私文書が最も多く、それは不法滞在者たる円仁が唐での巡礼生活を維持する上で、大変重要な役割を果たしていたからである。

そのうえ、円仁文書を、同時代に入唐した日本僧円珍が唐で提出した文書と比較すると、書式の面ではほぼ変わらないが、署名に関しては、円仁文書には「発信者＋状上」が多く見られるが、円珍文書にはすべて「発信者＋状」が用いられる。つまり、円珍文書と比べて、円仁文書の言葉遣いはより丁寧でうやうやしい。なお、『慶元條法事類』文書門は宋代の基準であるが、そのベースは唐制にあるので、参考に見てみると、「発信者＋状上」は見られない。したがって、円仁と円珍の署名の差の背景としては、不法滞在者と公的資格者と

いう、両者の唐における身分によると考えられる。

さらに、円仁文書を敦煌文献および同時代の書儀と照合すると、いずれも同じ書式に則って草されたことがわかる。一方、円珍が日本で公験を申請した際に鎮西府に提出した文書を、円仁・円珍の入唐後に唐官府に提出した文書と比べると、ほとんど同じ形式を取っている。このことから、唐の官文書は当時の日本の官文書の書式にも通用したことが見てとれる。円仁の「状」文書には、何通か帖・牒などによく使われる文言を用いる文書も見られる。前者はおそらく円仁の誤用だと考えられるが、後者は唐後半期の敦煌文献にもしばしば同じ用例が確認できる。敦煌文献と比較すると、円仁文書は書式から用語までほとんどそれと一致することが確認され、さらに唐の公式令を参考にした『養老令』にも同じ官文書の書式が記されることから、円仁は入唐する前に、既に日本に伝来した唐代の官文書と書信の書き方を習得し、入唐後も意図的に書儀を収集し勉強したことがうかがえる。

結語では、以上本論で述べた内容を要約し、本研究で明らかにしてきたことの歴史的位置付けと今後の課題について述べた。

前述したように、九世紀半ばに起きたウイグル帝国の崩壊によって、モンゴル高原においてウイグルとキルギスの政権が交代した結果、東アジアないしユーラシアにおいて一大転機といえるトルコ民族の西方移動が幕を開いた。唐王朝は前後して北方辺境に避難してきた南走派ウイグルと使者を派遣してきたキルギスを迎えることとなり、この両者と幾度となく外交交渉を行った。その交渉の実態に迫りながら、この大きな転換点における東アジアの国際環境の一端を明らかにすることがまさしく本研究の目的である。

まずは、南走派ウイグルに対して、唐朝廷は①戦争によってもたらす混乱の回避、②南走派ウイグルと同行する太和公主の安否、③南走派ウイグルと戦争を起こすための辺境軍事力の不足などを背景に、ひたすら懐柔政策を講じていたが、辺境防衛責任者の太和公主救出とキルギスの来朝をきっかけとして、南走派ウイグルの殲滅を決意した経緯が明らかとなった。そして、河東節度使の事例からわかるように、辺境の軍鎮は中央政府とは別に、自ら周辺諸蕃と外交交渉を行うことがあって、そして時には中央政府の外交政策に多大な影響を与えることもあったのである。

次に、キルギスに対しては、唐朝廷はこのモンゴル高原の新興勢力と交渉するに際して、お互いに親近感を持たせるために、両国の同族関係を強調する一方で、キルギスがウイグルのようになることを警戒して、両国の尊卑を常に主張しており、自国の優位性を示そうとした。その国書の撰文過程からも、唐王朝のこのような慎重な外交姿勢がうかがえる。

要するに、モンゴル高原において、ウイグル可汗国が再興されなかった背景には、唐をめぐる国際環境の変化と、唐辺境諸勢力の動向とが連動して関与していた。このようにして、テュルク民族西方大移動の幕が開かれ、東アジアにおける、新しい国際秩序の再編成が始ま

ったのである。

一方で、本研究で検討してきた国際文書についていえば、国書をはじめとする王言の起草は一般的には、中書舎人・翰林学士・知制誥によって分担されているが、玄宗期の宰相張九齡と武宗期の宰相李徳裕が国書の撰文に関わっている事例から見て取れるように、皇帝に信任されている宰相は国書を起草することもあった。そして、この国書の撰文過程は唐一代を通じて、一定の有効性があると考えられる。

また、このような王言は宰相によって起草されたとはいっても、それは必ずしも宰相個人の意志で決定されるわけではなく、一定の手続きを踏まなければならない。南走派ウイグル対策を決定する場合、百官集議や宰相会議、御前会議で繰り返し議論した結果を踏まえて、議状が作成され上奏されるが、皇帝に認められると、国の正式な政策となると考えられる。このような手順は外交関係の政策決定のみならず、唐王朝中央の政策決定システムを検討する際に、重要な参考となると思われる。

そのほか、円仁文書の分析からは、唐の行政文書が東アジアで通用していたことがうかがえる。特に円仁が唐の官衙等に宛てた公的文書として用いられた「牒」文書は、国書以外の外交文書として使用されており、例えば、唐と南詔国の間、渤海中台省と日本太政官の間、または新羅執事省と太政官の間では、いわゆる西嶋定生の提唱した東アジア漢字文化圏において「牒」文書が広く用いられていた。実は、元の文書は伝わっていないが、本論文で取り上げたウイグル宰相も唐の河東節度使に「牒」文書を出していた。これはすなわち、外交文書としての「牒」文書が漢字文化圏を超えて、東アジアの国際文書として広く通用されていたといえよう。

要するに、本研究は、九世紀前半にモンゴリアのウイグル帝国の崩壊によって、唐の北方辺境に避難してきた南走派ウイグル、のちに来朝したキルギスとの間に交わされた外交文書を切り口に、唐の外交政策の変遷を追うことで、ユーラシア史上の一大転機ともいえるトルコ民族西方大移動が起こる直前の、東アジアの国際関係の一端を解明しようとする試みの一つである。

しかしながら、これはあくまでも東アジアの国際情勢変動のきっかけの一つに過ぎず、その後の東アジアの国際関係はどのように変容し、五代十国時代に移行していったのか、さらにはそれがどのように変容して宋・元の時代を迎えるのか、などの問題を総合的に検討する必要がある。ただし、それらは本論の分析領域を超える問題であり、いずれも今後の課題としたい。